

北上の
素晴らしい食材を
多くのお客様に
お届けしたい。



枕流亭、北上調理師会会長
北上コロッケ開発者
おかじま しんじ
岡島親吾さん

宿場町として栄えてきた歴史を背景に、
このまちで育まれた多様性を表現した「北上コロッケ」。
若き料理人たちの故郷に込めた思いが、新しい名物を生み出しました。

枕流亭は明治32年創業、私で5代目になります。北上は南部藩と伊達藩のちょうど境目。様々な人や物資が行き来する宿場町として、かつては舟運も盛んでした。そのため初代は川沿いに店を構えたのですが、鉄道の開通に伴って賑わいは街場に移り、この辺りは北上の奥座敷に。しかし、時代の流れとともに料亭も少なくなり、うちの店の形態も料理も昔とは随分変わりました。

北上は飲食店に活気があると言われるが、宿場町の時代から旅人を受け入れ、もてなす文化がベースに

あるように思います。工業団地も多いため、今でも外からいろいろな人が訪れますし、最近は桜を見に来る外国人もかなり増えました。

でも、これだけ多くの人を訪れる場所でありながら、北上には名物と言えるものがずっとなかったんです。ここには米も野菜もあるし、果物も和牛もある。その上、新しいものが入ってくると面白がって取り入れる。この多様性が、北上コロッケの開発につながるキーワードになったんです。

まちの想いをコロッケに込めて

北上コロッケは、北上市調理師会青年部の有志で開発を手がけました。改めて北上らしさを考えたのですが、多様な人々を受け入れ、それをうまく融合して一つの街を形づくっていることに注目したんです。だったら、いろいろな食材を入れて、その相乗効果で美味しくなるメニューを作ろう。こうして、二子さといも、黒毛和牛、白ゆりポーク、アスパラガスと、4つの特産品を入れた北上コロッケが生まれました。

ルールは、材料だけ一緒に味付けは自由。それぞれの店の個性を打ち出して、市内を食歩きできるようにしたんです。これが好評で徐々に注目を集めるようになりましたが、大きかったのはB-1グランプリに出展できたこと。我々の自信になりましたし、堂々と「北上の名物です」と言えるようになったんです。

この開発がきっかけで、農家の人たちとの交流も生まれました。農家さんの想いやこだわりを知り、改めて食材の素晴らしさを見直し、互いに相談し合える関係も築けました。今振り返ると、北上の名物づくりは、故郷を見つめ直す良いきっかけだったと思うんです。農業をはじめ、この街にはいいものがいっぱいある。でもそのポテンシャルの高さを、生かきれていないだけなんです。これから来るインバウンドの波を、まちづくりにいかにつなげ、魅力を発信していくのか。私たちの腕の見せ所だと思っています。



老舗料亭の息子として、小さい頃から人の流れを見てきた岡島さんは、「北上のベースは農業」と言います。移り変わりの早い工業とは違い、農業は生きるために必要とされるもの。「農業が元気だと活気が違いますよ」と岡島さん。

北上の イトコ!

何かと便利で
人があったかい

新幹線も高速道もすぐ近くにあるし、車で30分も走れば飛行機にも乗れます。今の時代、どこにいても情報は手に入るし、スピード感を持って移動できるかどうかポイント。その点、ここは便利なまちで、人もあったかい。気軽に来て北上の魅力を見つけてほしいですね。



B-1グランプリを始め、様々なイベントで引っ張りだこの「北上コロッケ」は、すっかり北上の名物として定着。「商品開発はとても大変ですが、第2弾の名物づくりにも取り組みたいですね」と意欲を燃やしています。



伝統を受け継ぐ鬼と
最先端の工業、
両方が共存するなんて
面白いですよね。

あいほら あやこ
相原彩子さん
北上市立鬼の館 主任学芸員

「鬼剣舞」に象徴されるように、「鬼」は北上の魅力伝えるキーワード。
北上市の鬼剣舞発祥の地にある「鬼の館」には、鬼にまつわるモノやコトがいっぱい。
なぜ、北上には鬼が受け継がれているのか。その不思議を解き明かします。

北上市は民俗芸能がとても盛んな地域で、その代表格が鬼剣舞です。その起源は古く、中世の「念仏踊り」をもとにしながら、現在のような踊りの形が出来上がっていったと伝えられています。市内には多くの踊り組がありますが、源流とされるのが「北上市立鬼の館」がある和賀町岩崎地区の岩崎鬼剣舞。ここを起点として市内に広がり、現在は岩崎系と滑田(なめしだ)系の2系統およそ13組が伝承されています。
私は川岸地区の出身ですが、小さい頃から当たり前のように鬼剣舞を見て育ちました。幼稚園や保育園の頃から教える地域もありますし、小学生になって

本格的に鬼剣舞を習って極めていく子どもたちもいます。一時期、戦争や後継者不足から伝承が難しい時代もありましたが、住民が一丸となって守ってきた地域が多いんです。
それほど鬼剣舞は私たちにとって、地域の絆をつなぐ象徴であり、精神的な拠り所。北上市民憲章の中にも「あの高嶺／鬼すむ誇り」という一節があるのですが、鬼は仏の化身であり、憧れであり、とても身近な存在です。鬼の館ができたのも、鬼剣舞に拠る所が大きく、鬼をめぐる様々な事柄を集め、紹介しています。



「鬼の館には家族連れが多いのですが、3、4歳の幼い子どもでも何かを感じ取り、泣いて入れない子もいるんですよ」と相原さん。
鬼は人間の本能を揺さぶる不思議な力を持っていると言います。

伝統と新しさが共存する面白さ

鬼というと悪いもの、忌むものと捉える向きがありますが、鬼の館には、心優しい鬼やひょうきんな鬼、厄から守ってくれる鬼など、個性豊かな鬼がいっぱいいます。一つの側面だけでなく、鬼の多様性を知ること、子どもたちの物事の見方を広げてくれます。でもその一方では、やはり人知を超えた恐ろしい存在でもあって、そうした恐れ多いものがこの世にいることを感じるって大事なことだと思うんです。
面白いことに北上は、新しいものを受け入れる土地柄でもあるんですが、民俗芸能のような伝統文化も大切にしている。特に鬼なんて、科学では証明できない異次元のものじゃないですか。新しさと伝統、最

先端と未知なるものの両極を受け入れて共存できるところが、この街の魅力じゃないかと思います。それは、多様な文化を融合しながら、新しいものを育める可能性にもつながるんじゃないでしょうか。
鬼の館は、怖い鬼から愛すべき鬼まで、様々な鬼に出会える数少ない場所です。心の奥底に潜む鬼との対峙は、忘れかけていたものを呼び覚ましてくれるものであり、時代を超えて残しておきたい大切なもの。この場所に来るたびに、心に引っかかる何かを思い出してくれたら嬉しいですし、鬼剣舞からもたくさんエネルギーをもらってほしいですね。



相原さんが学芸員として働く「鬼の館」には、世界各国から個性豊かな鬼が集められています。ちなみに鬼剣舞の「白面」を着けられるのは、演目の中で一人だけ。鬼剣舞を踊る人たちにとってあこがれの面だそうです。

北上市の
イトコ!

私を支えてくれる土台のようなまち

北上は優しい人ばかりで、自分のことのように鬼の館を応援してくれる人が多いんです。離れたと思った時もありましたが、ここは離れたが魅力がたくさんあるまち。根っこのように私を支えてくれる場所です。